

代の建築を推論した。あとのふたつはさう新しい發表でもないのに、いまでもこれが唯一の典據であり唯一の資料である。いかにこの方面の調査が遅々として進んでゐないかを示すものである。

「瀋陽獨樂寺」「滿洲國義縣奉國寺大雄寶殿」「大同大華嚴寺」の三篇は遼代木造建築の調査研究であつて、前のふたつ古寺は博士自らの發見にかゝる。これに博士發見の嵩山少林寺初祖庵(宋宣和七年建)、伊東博士發見の應縣佛宮寺木塔(遼清寧庫)を加へ、また博士の論證された大同善化寺三聖殿、天王殿をいれると遼金時代の木造建築はほゞうかがへるわけで、そこまでに學界を導いたのはまことに博士の功績であると思ふ。その調査の要領のよさ、考證の適確なことは全く感服のほかはない。これとともに遼金時代の塔塔研究にも随分貢獻されたところがあり、その一斑は「滿洲の古建築と古墳」によつてうかがへる。「大正覺寺金剛寶塔」「乾隆經營の長春園に於ける歐式建築」「熱河の離宮と喇嘛寺」もまた有益な、また興味ある文章である。「後漢の石廟及び畫像石」「六朝時代の畫像石」は「山東省に於ける墳墓の表飾」の著者として、よく歴史家の間にも知られてゐるが、これも下に收めた雲岡、義縣、天龍山、山東諸石窟、及び「大倉集古館收藏の石佛に就いて」等の一聯の石佛石窟研究はまた博士の一面を示すもので、この方面に對する貢獻が偲ばれる。いまこれを常盤博士との共著「支那佛教史蹟」とくらべて見ると、こゝにある小論の方が切實であり、適確であつて、博士の面目が躍如してゐるのを覺える。そのほか玉とか石の雜工に關したものは別に得意のものとも思へぬが、支那から印

度にかけて旅行記はまことに重要な調査文獻であるし、また「西遊雜信」印度の部のごときは宛然印度美術、ひいては東亞美術の概觀であつて、もうひとつ大きな意味における本書の総括篇であるとともに、また誰にすゝめてもよい興味ある讀物でもある。

關野博士が支那建築史乃至藝術史に對する大きな寄與は誰も認めるところであるが、それはどういふ寄與であるかといふと、實地の調査といふ點である。そしてその調査の要領のいゝこと、そしてそれを見事に歴史的に處理されたことが博士獨特の風貌をかたちづくるものであつて、それが博士の「支那藝術史概説」を生んだのである。本書一卷はさういふ意味で支那建築史の、また藝術史の寶庫であるが、この寶庫をいつまでも寶庫として、後生大事にかゝへてをらねばならぬ日本學界の現状をわたくしはなほだ情なく思ふ。菊版八三八頁、別刷圖版八、昭和十三年九月、岩波書店刊、定價六・五〇(「水野清」)

支那考古學論攷

梅原末治著

「此の書は濱田先生の許で過した二十餘年に亙る永い間に、折にふれて書いた私の貧しい考古學上の論攷中、支那に關するもの、集録であつて、次に印行する日本の部分と姉妹編をなすものである。」「いまこれを靈前に捧げなければならぬを思ふと、數々の思出が胸にせまつて、かなしみの涙を新にする次第である。これらの言葉が本書の初めに見えてゐるが著者が本書を編んだ意圖を

推すに難くない。

本書の中心をなすものは古銅器、古鏡の研究である。先づ「支那古銅器研究に對する一考察」に於いて、著者は従來行はれた「古式の繼承」を肯定する見解が妥當でなく、形式學的に所謂三代銅器、所謂秦銅器、漢器の系列が可能であるとの立場を明らかにして、遺跡や共存遺物の状態が充分判らない以上、散在的資料の蒐集の上に立つ形式學上の觀察が、次善の科學的方法たることを述べてゐる。かくて次の「支那古代の利器に就いて——斧頭と戈類」、「支那の青銅器時代に就いて」の二篇に於いては、史前文化發展の三段階說の概念に本づき支那の青銅器時代の性質を究めることに意を用ゐてゐる。支那の青銅器中特色の著しい斧頭(特に戊)と戈の形式的發展をトレースし、而も殷墟の遺物は實用から遠ざかつて形式化し明器的であり、この裝飾圖文は所謂三代の尊彝のそれと同じ範疇に屬し、銅容器と銅利器とが結びつき、又殷墟の利器の示す上述の如き様相は當然それ以前に供した眞の青銅利器の行はれた時期を想定すべきであるとする。その想定こそ特色ある尊彝出現の背景を理解せしめるもので即ち青銅利器の特殊な發展こそ青銅器の製作を導いたのであるとする。かくて現在見られる銅斧乃至戈の類の示す文化段階は實に青銅器時代の後期に屬しその實年代は大體殷の後半に比定されることが述べられてゐる。

同様な形式學的系列のなされたものに「漢以前の古鏡」、支那古鏡概説」がある。前者は關係資料三百餘面を蒐めて戰國秦式鏡の

性質を明らかにしたもので、鈕を中心とする鏡の形と形に關係なき文様との二元的混在は、次の漢鏡に於ける完成統一への發達過程を示すものであるとする。後者は秦鏡から唐鏡にいたる概説である。而してこれら古鏡の考察に於てはさきの銅器の場合と同じく化學的分析の結果が興味深く取入れられてゐる。「古鏡の化學成分に關する考古學的考察」に於いては、上は戰國秦式鏡より下は明代にいたる試料五十六面の分析の結果によつて著者の考へを傍證し、兼ねて古鏡外觀上の色澤の差異が成分によらないと説き及んでゐる。そしてこの化學的分析の場合その試料はあくまで考古學的に確實な遺物の系統立つた群が選ばれねばならぬと著者は自己の考古學的立場を堅持してゐる。著者のかゝる主張は「化學上より觀た支那の純銅器時代の確認」に就いての疑問」の駁論となすれば、たとひその成分に錫を含まなくとも純銅器時代なるものの概念に當らずと説いたものである。

以上の諸篇に見ゆる著者の「系列」觀は、更に「東亞の古瓦に就いて」に於いてその對象を異にしたがらも考察の基本となつてゐる。支那本土の古瓦として戰國時代から漢代六朝を述べ、朝鮮に於いては北方の高句麗と新羅によつて代表される朝鮮のものとの差が、その本づく所支那南北兩朝の系統を夫々ひくことによるとし、更に南鮮の系統をひいた我國のものは、新羅瓦の巧緻な圖様に數語を輪するが、かへつて元來瓦が屋蓋の飾たるに於いては我が古瓦が瓦本來の意味を保持するものであり、又新羅の瓦が一の

工作場で作られて配給されたに對し、我國のものは個々の寺院や宮殿の建築が考慮されて夫々に焼かれたものであることが述べられてゐる。著者の「系列」観は更にその「形式」観によつて組織立てられたものであるが、かゝる著者の「形式」観の端的に示されたものが「端方積藏校禁の成立に對する考古學上の一考察」、「傳殷墟發見の銅製品に就いて」、「殷墟出土の白色土器に就いて」である。かくて著者の「形式」観、「系列」観は獨自な意味をもつて来る。次に編中の「殷墟出土の一古琮」、「河南安陽出土と推定せられる二個の尊彝」、「支那古明器の一新資料」、「支那漢代の玻璃」、「支那發見の漢代の漆奩」、「支那發見古代漆器の新材料」、「傳長沙出土の木彫怪獸像」の諸篇は何れも斷片的資料の正確な記述による報告である。現在の支那本土の考古學的研究に於いては主としてかゝる斷片的資料によらねばならず、遺跡と一括遺物の殆んど不明なるに對して、たゞ僅かに不十分とは云へ安陽と金村とが例外をなしている。「河南安陽と金村の古墓」がその説明として興味深い。

本書の諸篇は何れも著者が歐米より歸朝後の研究發表であるが本書の最後の三篇は歐・米・露に於ける博物館中心の彼地支那考古學研究の状態を述べたものである。その記述の系統あることによつて、本書にもられた著者の考察が歐米遊學の際育まれて發展したものであることを充分察せしめる。

以上専ら本書の内容を述べ來つたが直ちに看取できることは、著者の「形式」観、「系列」観が獨自の立場に於いて一應きはまつた完璧の體系を示してゐることである。著者はかつて考へに餘裕と

發展を與へるべく、しばらく眼を他に轉じたいと云はれてゐたのを自分は覺えてゐる。さうした言葉を併せ考へる時本書の出版が自分には一段と意義深く感ぜられるし、又學界も等しく著者の次の發展を期待してゐることを信ずる。最後に適切豊富な圖版と卷末の索引とが又本書の特色をなしてゐることを附記する。(菊判、本文五九三頁、圖版一五五、昭和十三年十月、京都弘文堂發行、定價七・〇〇)(澤田正一)

赤峰紅山後

滿洲國熱河省赤峰紅山後先史遺蹟

東方考古學叢刊 甲種第六册

東亞考古學會編

熱河といへば承德の離宮を思ふほど、事變以來この地も人々に親しいものになつたが、われ／＼はまた別な意味でかねてから熱河の地にあこがれを抱いて來た。考古學教室の陳列室にある、赤峰の牟田氏から寄贈を受けた青銅器その他の一群の遺物が、この地への興味を誘ふからである。昭和十年初夏、久しい希望は實現されて東亞考古學會がこゝに發掘を試みることとなり、故濱田先生は自ら諸氏をひきゐて調査の事に當られたのであるが、その結果は豫期した石槨墓群の發掘以外に、彩文土器の新遺蹟を發見するなど、非常な收穫を得て歸國せられたのであつた。本書はそれらの調査研究の結果を一本にまとめたものである。

本書の内容は濱田耕作・水野清一兩氏の筆になる「滿洲國熱河